佐久市埋蔵文化財調査報告書　第291集

岩村田遺跡群

MIYANOMAE

宮の前遺跡Ⅲ

長野県佐久市岩村田宮の前遺跡第３次発掘調査報告書

２０２３.３

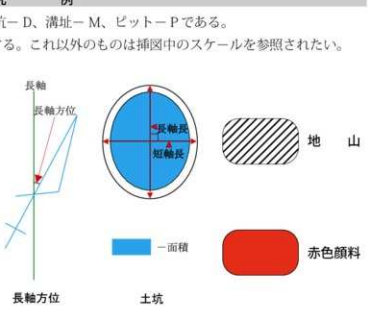
佐久市教育委員会

例　　言

1　本書は長野県佐久市に所在する岩村田遺跡群宮の前遺跡Ⅲの発掘調査報告書である。
2　事業主体者　有限会社平和住宅が行う宅地造成に伴う記録保存を目的に佐久市教育委員会が実施した。
3　遺跡名及び所在地　　宮の前遺跡Ⅲ（ＩＭＥⅢ）　佐久市岩村田字宮の前 1993 他
4　調査期間及び面積　　発掘作業：令和３年４月１日～令和３年４月 21 日
　　整理作業：令和３年４月 22 日～令和５年３月 17 日
5　本書に掲載した地図は佐久市発行の都市計画図（1：2,500）、佐久市教育委員会作成の遺跡詳細分布図（1：5,000）である。
6　遺構測量は TS を用い３次元データを取得した。取得したデータは株式会社 CUBIC の「遺構君」により図化した。図面トレースは「遺構君」で行い、Adobe　Illustrator で調整した。写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、Adobe　Photshop で補正等を行った。編集は Adobe　InDesign で行った。
7　本書の作成・編集は小林が行った。
8　本書及び発掘調査の図面・写真などの記録及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　　例

1　遺構の略記号は古代以前の竪穴建物－Ｈ、土坑－Ｄ、溝址－Ｍ、ピット－Ｐである。
2　挿図の縮尺は遺構 1/80、遺物 1/4 を基本とする。これ以外のものは挿図中のスケールを参照されたい。
3　海抜標高は、水糸標高をスケールに「標高」と記してある。土層の色調は、１９９９年版「新版標準土色帖」基づいた。
4　遺物挿図番号・遺物写真番号・遺物観察表番号は一致する。
5　遺構の計測値は下図に示した部分の測定値である。面積は床面積、壁残高は最大値である。
6　遺構の形態は長軸長と短軸長の差が１割を超えたものを長方形、楕円とした。
7　挿図中の網掛けは以下の表現である。



目　　次

第Ⅰ章　発掘調査の経緯 …… 1
　第１節　発掘調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査体制 …… 1
　第３節　検出遺構・遺物の概要 …… 2
第Ⅱ章　遺構と遺物 …… 2
　第１節　竪穴建物 …… 2
　第２節　土坑 …… 2
　第３節　溝 …… 5
　第４節　ピット …… 13
第Ⅲ章　まとめ …… 13
　第１節　環濠について …… 13
　第２節　人形土器について …… 14
　第３節　石戈について …… 14
　第４節　粘土紐巻上成形無調整鉢について …… 16

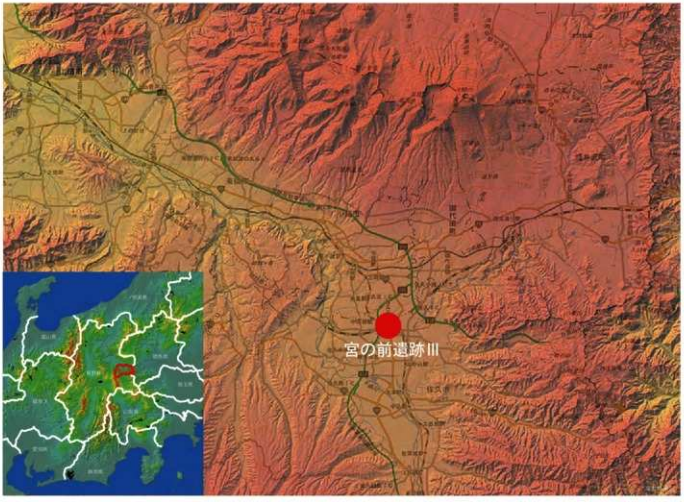
第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至る経緯

岩村田遺跡群は、北・東・西一本柳遺跡、西八日町遺跡、上の城遺跡などを包括する巨大な遺跡群であり、佐久市北部の岩村田地籍に所在する。今回、同遺跡群内の宮の前遺跡内において、有限会社平和住宅による宅地造成工事が計画されたため、佐久市教育委員会では遺跡の確認調査を実施した。その結果、弥生時代後期の遺構、遺物が確認されたため保護協議を行い、道路建設部分について記録保存を目的とした発掘調査を行うこととなった。

第２節　調査体制

調査受託者	佐久市教育委員会	教育長	棚澤晴樹　吉岡道明（令和３年５月～）
事務局	社会教育部	部長	土屋　孝
	文化振興課	課長	平林照義 (令和３年度)・中沢栄二 (令和４年度)
		企画幹	谷津和彦 (令和３年度)・井上　剛 (令和４年度)
	文化財調査係	係長	山本秀典 (令和３年度)・伊澤信子 (令和４年度)
		係	冨沢一明　上原　学　羽毛田卓也 (令和３年度)



第１図　宮の前遺跡Ⅲ位置図

	久保浩一郎　松下友樹（令和４年度）　小林眞寿
調査担当者	小林眞寿
調　査　員	甘利隆雄　岩松茂年　大矢志慕　小林喜久子　小林節子 小林敏雄　清水律子　副島充子　田中ひさ子　花岡美津子 堀籠滋子　宮川真紀子　山口ひとみ　柳沢孝子　柳沢千賀子 山田叔正　油井満芳

第３節　検出遺構・遺物の概要

遺構　竪穴建物－１棟　土坑－ 10 基　溝－５条　ピット－ 11 基
遺物　弥生土器　土師器　石器・石製品

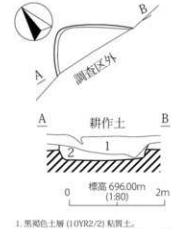
第Ⅱ章　遺構と遺物

第１節　竪穴建物

Ｈ１号竪穴建物（第２図）

調査区中央やや西寄で検出された。南方向に調査区外に延びるため、北東隅が検出されただけであり、全容は不明である。深度 0.22 m の規模である。調査範囲には周溝、ピット、炉等の付属施設は存在しなかった。堀方は極めて浅く、床を剥ぐと地山が出現する状態であった。

出土遺物は皆無であり時期は不明であるが、弥生時代後期の所産の可能性が高いものと思われる。



1. 黒褐色土層（10YR2/2）粘質土。
2. 黒褐色土層（10YR3/2）10YR7/4ローム粒子多含。

第２図　H1 号竪穴建物

第２節　土坑

Ｄ１号土坑（第３図）

調査区西端で検出された。西、南方向に調査区外に延びるため全容は不明である。検出部分では他遺構との重複は認められない。壁残高 1.09 m の規模である。覆土最下層にあたる３層はロームと黒色土が互層に堆積し、版築状態であった。

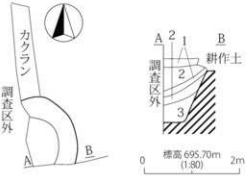
遺物は弥生土器が出土している。１は脚内を除き赤彩が施される高坏の脚上部片、２はミガキ調整が施された甕の底部片、３は外面に赤彩が施される壺の体部片である。体部下半で強く屈折する器形である。

以上の出土遺物の特徴から、本址は弥生時代後期箱清水期の所産と考えられる。

Ｄ２号土坑（第３図）

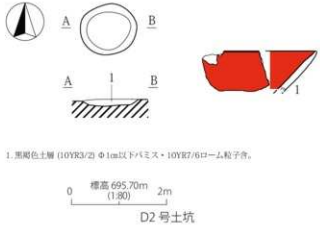
調査区中央やや西寄で検出された。他遺構との重複は認められない。平面楕円、断面鍋底の形態である。N－80°－E に長軸方位をとり、長軸長 1.20 m、単軸長 1.06 m、壁残高 0.14 m、面積 0.58㎡の規模である。

遺物は内外面に赤彩が施される弥生土器の鉢片が１点出土している。１片の出土遺物ではあるが、本址は弥生時代後期箱清水期の所産と思われる。



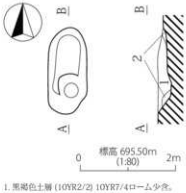
1. 黒褐色土層 (10YR2/2) Φ 1cm以下パミス少含。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2) Φ 1cm以下パミスと10YR7/4ローム多含。
3. にぶい黄橙色土層 (10YR7/4) ロームと10YR2/2の帯状堆積＝版築土？

D1 号土坑



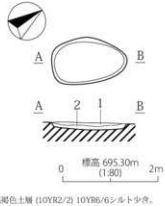
1. 黒褐色土層 (10YR3/2) Φ 1cm以下パミス・10YR7/6ローム粒子含。

D2 号土坑



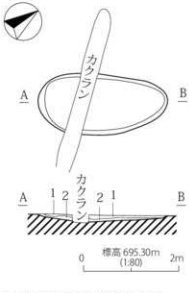
1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR7/4ローム少含。
2. にぶい黄橙色土層 (10YR7/4) ローム、10YR2/2極少含。

D3 号土坑



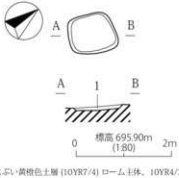
1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR6/6シルト少含。
2. にぶい黄橙色土層 (10YR6/3) シルト、10YR2/2少含。

D4 号土坑



1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR6/3シルト含。
2. にぶい黄橙色土層(10YR6/3) シルト、10YR2/2少含。

D5 号土坑



1. にぶい黄橙色土層 (10YR7/4) ローム主体、10YR4/3含。

D6 号土坑

第3図　土坑(1)

D３号土坑（第３図）

調査区西側、M2 と M3 の間で検出された。他遺構との重複は認められない。平面楕円、断面は２段落ちの鍋底の形態である。N－４°－E に長軸方位をとり、長軸長 1.84 m、単軸長 0.83 m、壁残高 0.27 m、面積 0.64 ㎡の規模である。

出土遺物は皆無であり、本址の時期は不明である。

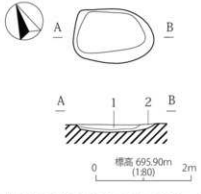
D４号土坑（第３図）

調査区西側、D3 の西北で検出された。他遺構との重複は認められない。平面楕円、断面逆擂形の形態である。N－38°－E に長軸方位をとり、長軸長 1.59 m、単軸長 0.99 m、壁残高 0.18 m、面積 1.00㎡の規模である。

出土遺物は皆無であり、本址の時期は不明である。

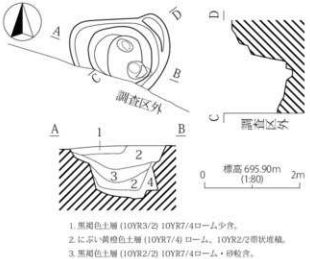
D５号土坑（第３図）

調査区西側、D4 の西で検出された。暗渠に切られる。平面楕円、断面鍋底の形態である。N－35°－E に長軸方位をとり、長軸長 2.74 m、単軸長 1.31 m、壁残高 0.14 m、面積 2.31㎡の規模である。



1. にぶい黄褐色土層（10YR4/3）φ1cm大パミス・10YR7/4ローム少含。
2. にぶい黄褐色土層（10YR5/3）10YR7/4ローム多含。

D7 号土坑

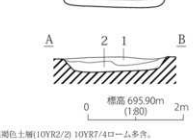


1. 黒褐色土層（10YR3/2）10YR7/4ローム少含。
2. にぶい黄橙色土層（10YR7/4）ローム、10YR2/2帯状堆積。
3. 黒褐色土層（10YR2/2）10YR7/4ローム・砂粒含。
4. 10YR3/2・2/2・砂の混在、10YR7/4ローム少含。

D8 号土坑

1. 黒褐色土層（10YR2/2）10YR7/4ローム極少含。
2. にぶい黄橙色土層（10YR7/4）ローム主体、10YR2/2少含。

D9 号土坑



1. 黒褐色土層（10YR2/2）10YR7/4ローム多含。
2. にぶい黄褐色土層（10YR4/3）砂粒多含、10YR2/2・7/4ローム少含。

D10 号土坑

第４図　土坑 (2)

出土遺物は皆無であり、本址の時期は不明である。

D 6 号土坑 (第 3 図)

調査区東側、M3 と M4 の間で検出された。他遺構との重複関係は有さない。平面長方形、断面逆梯形の形態である。N － 26°－ E に長軸方位をとり、長軸長 0.99 m、単軸長 0.85 m、壁残高 0.11 m、面積 0.59㎡の規模である。

出土遺物は皆無であり、本址の時期は不明である。

D 7 号土坑 (第 4 図)

調査区東側、D6 の東で検出された。他遺構との重複関係は有さない。平面楕円形、断面逆梯形の形態である。N － 58°－ W に長軸方位をとり、長軸長 1.68 m、単軸長 1.17 m、壁残高 0.17 m、面積 1.03㎡の規模である。

出土遺物は皆無であり、本址の時期は不明である。

D 8 号土坑 (第 4 図)

調査区東側、D7 の東で検出された。他遺構との重複関係は有さないが、南方向に調査区外に延びるため全容は不明である。平面は不整、断面逆梯形の形態である。壁残高 1.12 m の規模である。覆土の堆積状態は D1 に近似している。底面には、柱痕状の凹が 2 ケ認められた。

出土遺物は皆無であり、本址の時期は不明である。

D 9 号土坑 (第 4 図)

調査区東側、D6 の南で検出された。他遺構との重複関係は有さないが、南方向に調査区外に延びるため全容は不明である。平面は不明、断面逆梯形の形態である。壁残高 0.11 m の規模である。

出土遺物は皆無であり、本址の時期は不明である。

D 10 号土坑 (第 4 図)

調査区東側、東端で検出された。M4 を切る。平面長方形、断面逆梯形の形態である。N － 74°－ W に長軸方位をとり、長軸長 2.20 m、単軸長 1.36 m、壁残高 0.33 m、面積 4.63㎡の規模である。

出土遺物は皆無であり、本址の時期は不明である。

第 3 節　溝

M 1 号溝 (第 5 図)

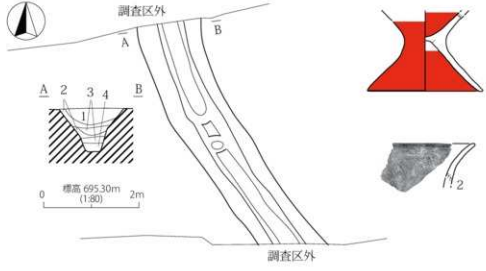
調査区西端で検出された。北西、南東方向の調査区外に延びるため全容は不明である。検出部分では他遺構との重複は認められないが、南東方向の延長線上で M2 と重複するものと思われる。検出長 5.35 m、最大幅 1.36 m、最大深度 1.05 m の規模である。底面は北西方向に傾斜し、緩やかに深度を増している。断面形状は両側壁に稜をなす「V」字状で、上面幅の 2 割程度の平坦な底面を形成する。

遺物は弥生土器及び人形土器が出土している。弥生土器は赤彩が施される高坏の脚と、櫛描波状文が施される甕の口縁部片が出土した。人形土器は M2 － 40 の両腕部分が出土しており、本址と M2 には遺構間接合の関係が認められる。

以上の出土遺物の特徴から本址の時期は、小山岳夫の弥生時代後期Ⅳ期に比定される。

M 2号溝（第6～8図）

調査区西端で検出された。北東、南西の調査区外に延びるため全容は不明である。検出部分では他遺構との重複は認められないが、南東方向の延長線上でM2と重複するものと思われる。検出長7.54 m、最大幅7.17 m、最大深度1.1 mの規模である。底面は北東方向に傾斜し、緩やかに深度を増している。断面は、西壁に明瞭な平坦面を形成し、その後東壁と共に緩やかに傾斜しながら狭く平坦な底面に至る。



1. 10YR2/2・7/4～7/6ローム混在。Φ2cm以下パミス含。＝人為撹拌土の二次堆積
2. 黒褐色土層（10YR2/2）粘質土。
3. にぶい黄橙色土層（10YR6/4）砂層。
4. にぶい黄褐色土層（10YR5/3）砂利層。

第5図　M1号溝址

遺物は弥生土器と人形土器、土製品、石器が出土している。弥生土器には鉢、片口鉢、高坏、甕、壺、蓋、手捏土器の器種が認められる。手捏土器は粘土紐の巻上げ痕をそのまま残す特徴的なもので、鉢形を呈する。片口鉢は無頸壺に片口を付けた1のようなものと、鉢に片口を付けた4の形態がある。鉢は基本的に内外面に赤彩が施されるが、2のように無彩のものも存在する。甕は櫛描波状文を施すものと、横羽状の斜走文を施すものが存在するが、いづれの場合も、頸部に櫛描簾状文を施すものと、施さないものが存在する。壺は外面底部と内面の頸部下以外に赤彩を施す。底部は強く内湾しながら立ち上がり、体部との境に稜を形成する。口縁は素口縁である。頸部文様帯にはヘラ描斜走文や、櫛描「T」字文を施すもの、文様帯を有さないものが存在する。33は筆者が「一本柳型壺」と提唱したもので、頸部文様帯が2段に分離され、文様帯間に赤彩が施される。蓋は無彩で天井部に9個の孔が穿たれているが、貫通しているものは6個である。人形土器はM1の項でも触れたように、M1、M2間で遺構間接合が認められるもので、頭部及び手を欠損するが、へそと思われる円環状の突起の下に、へそ部分の約2倍の径の断面円形の貼付部位が剥離した痕跡が認められる。東一本柳遺跡で出土しているような陽型土製品が表現されていた可能性が極めて高いものと考えられ、男性像であろうと思われる。これとは別個体の人形土器の体部片も1点出土しており、佐久平では、役割を果たした人形土器が最終的に環濠に廃棄される出土例が多いように思われる。土製品は土器片円盤が1点出土した。石器は磨石と磨・敲石が出土している。

以上の出土遺物の特徴から本址の時期は、小山岳夫の弥生時代後期Ⅳ期に比定される。

M 3号溝（第9図）

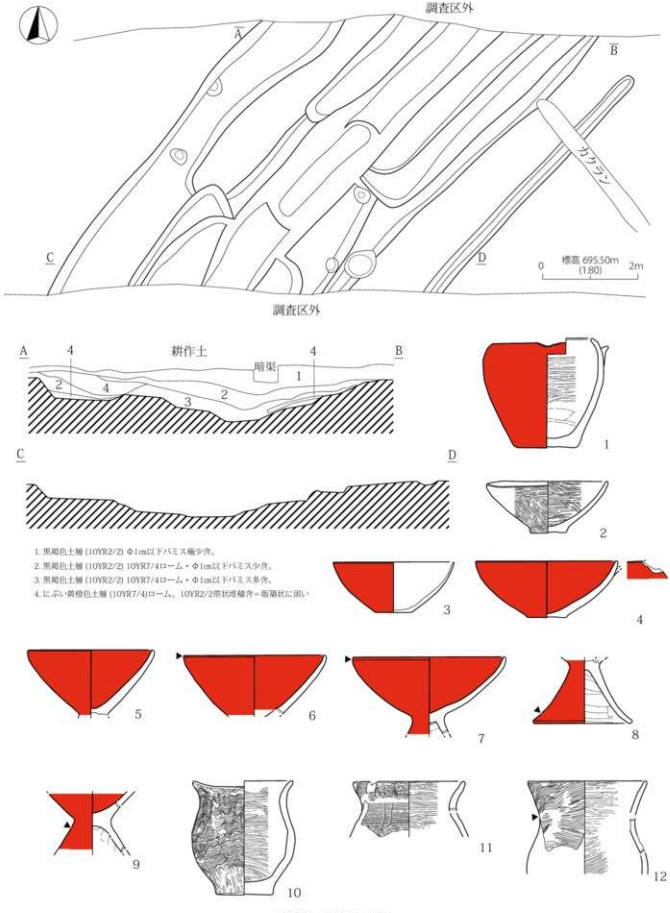
調査区中央で検出された。水田造成時にかなり削られた様子が認められた。南北に蛇行しながら東西に検出されたが、北方向に調査区外に延びるため全容は不明である。検出部分では他遺構との重複は認められない。最大幅2.52 m、最大深度0.5 mの規模である。断面は、比較的底面が広い逆梯形である。

遺物は弥生土器の壺片、土師器壺、「S」字状口縁甕片、磨石が出土している。

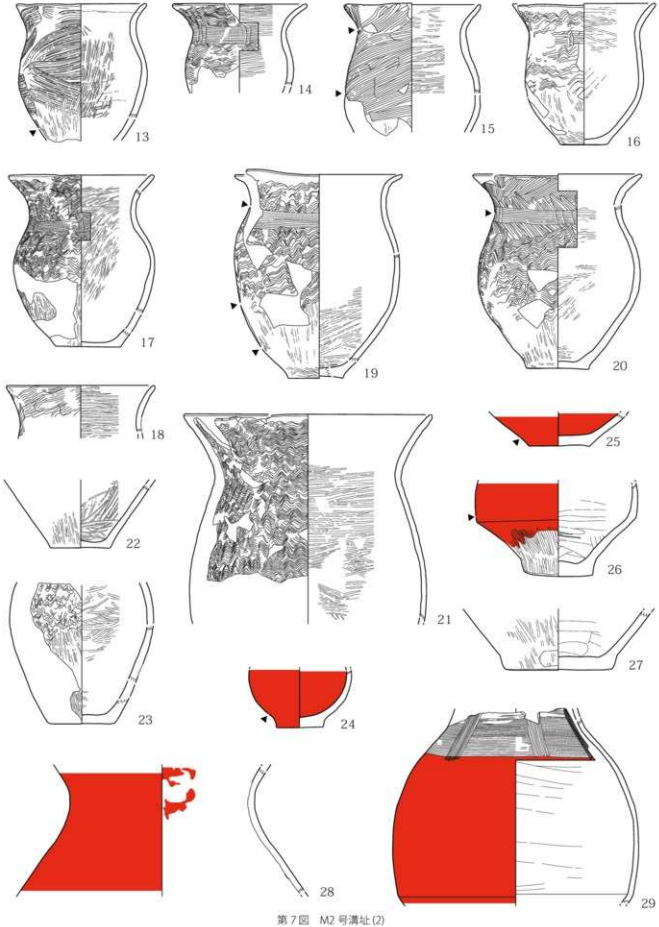
以上の出土遺物の特徴から本址は、古墳時代前期の所産と考えられる。

M 4号溝（第10～12図）

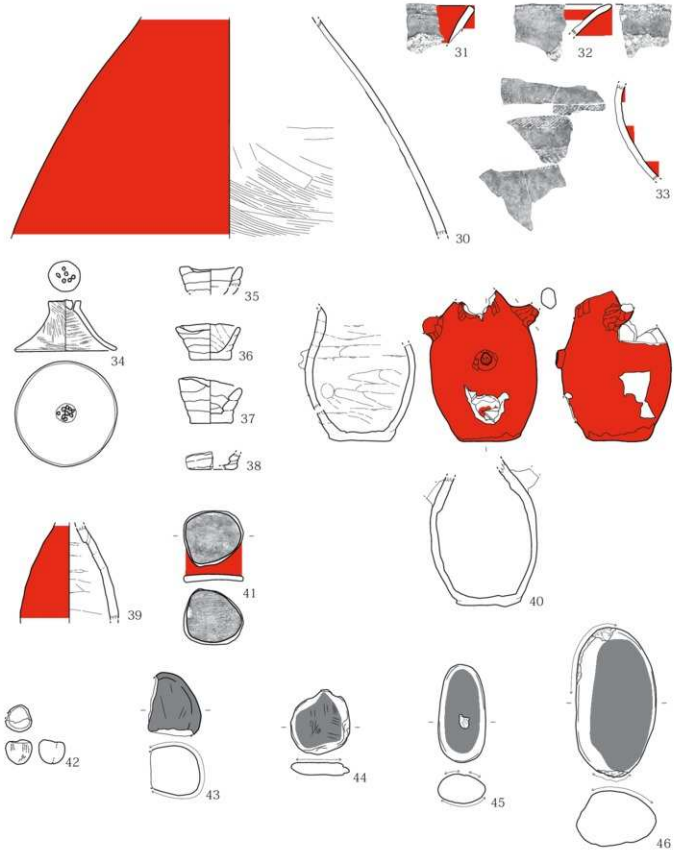
調査区東側で検出された。北西、東の調査区外に延びるため全容は不明である。M5号溝を切り、D10号土坑に切られる。検出長35.24 m、最大幅2.85 m、最大深度1.17 mの規模である。底面の傾斜は認められない。


調査区外
A
B
C
D
カクラン
標高 695.50m
(1:80)
0
2m
調査区外
耕作土
暗渠
1
2
3
4
1. 黒褐色土層 (10YR2/2) Φ1cm以下パミス極少含。
2. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR7/4ローム・Φ1cm以下パミス少含。
3. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR7/4ローム・Φ1cm以下パミス多含。
4. にぶい黄橙色土層 (10YR7/4)ローム、10YR2/2帯状堆積含＝板築状に固い

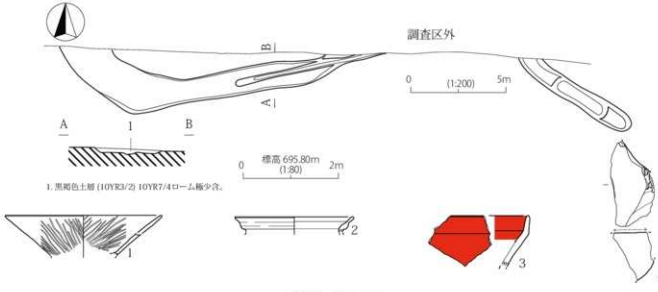
第6図　M2 号溝址 (1)



第７図　M2 号溝址 (2)



第8図　M2 号溝址 (3)



第９図　M3 号溝址

断面は、北東壁に明瞭な平坦面を形成する「V」字状であり、底面は平坦であるが極めて狭い。

遺物は弥生土器と石器が出土しているが、ほとんどの石器は、本址を切る水田造成時の暗渠の構築材として使用されていたものである。弥生土器には鉢、高坏、甕、無頸壺、壺の器種が認められる。鉢は内外面に赤彩が施される。高坏も脚内面を除き赤彩が施される。６・７のように大型・長脚のものと、他の小型短脚のものが存在する。また、５のような透かしが施されるものも認められた。甕は櫛描波状文を施すものと、横羽状の斜走文を施すものが存在するが、いづれの場合も、頸部に櫛描簾状文を施すものと、施さないものが存在する。壺は外面底部と内面の頸部下以外に赤彩を施すものが多いが、無彩の 38 のようなものも存在する。底部は強く内湾しながら立ち上がり、体部との境に稜を形成する。口縁は素口縁と受口のものが存在し、29 のように片口を付けるものも存在する。頸部文様帯には上段に櫛描簾状文を施し、その下に櫛描横走文を施すものが多いが、櫛描「T」字文を施すものや、文様帯を有さないものも存在する。35 は筆者が「一本柳型壺」と提唱したもので、頸部文様帯が２段に分離され、文様帯間に赤彩が施される。無形壺も赤彩が施されるものと、施さないものが存在し、いづれの場合も口縁部が内湾する。25 は口縁直下に孔が穿たれている。石器は砥石、台石、磨石、磨・敲石、石戈片が出土している。石戈は、佐久市で４例目の出土であるが、１点は剣の可能性もある。出土品には鎬と樋が表現されており、小片ではあるが確実に石戈である。

以上の出土遺物の特徴から本址の時期は、小山岳夫の弥生時代後期Ⅳ期に比定される。

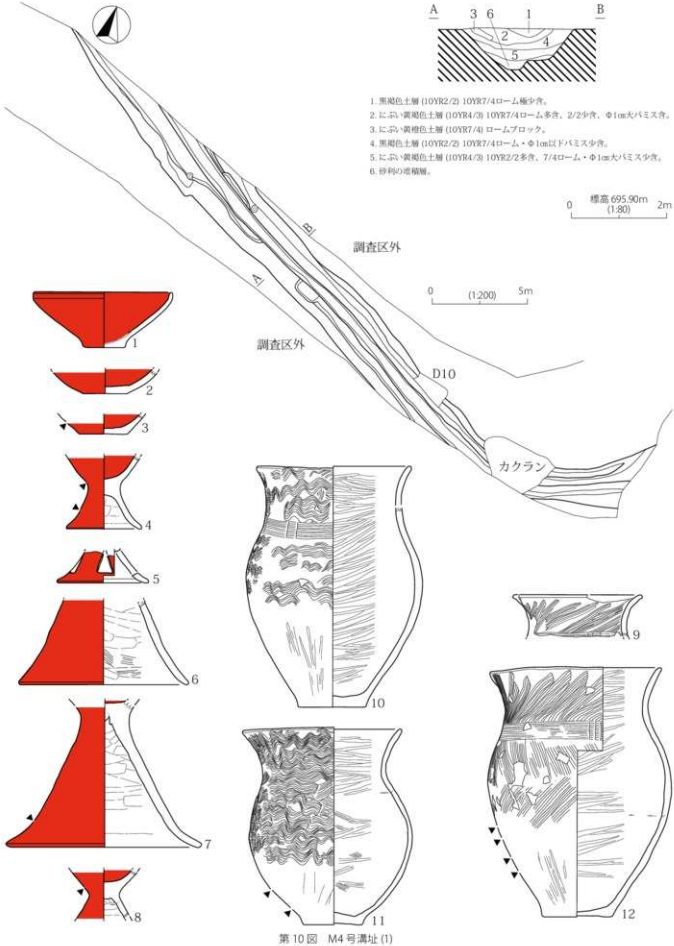
M ５号溝 (第 13 図)

調査区中央やや東寄りで検出された。北方向を M4 に切られ、南方向は調査区外に延びるため全容は不明である。検出長 2.64 m、最大幅 0.32 m、最大深度 0.39 m の規模である。断面は「V」字状である。M2 の東側に不随する幅狭な溝部分に良く似ているが、本址の方がしっかりとした掘削が行われている。長辺方向に底面の傾斜は認められず平坦である。

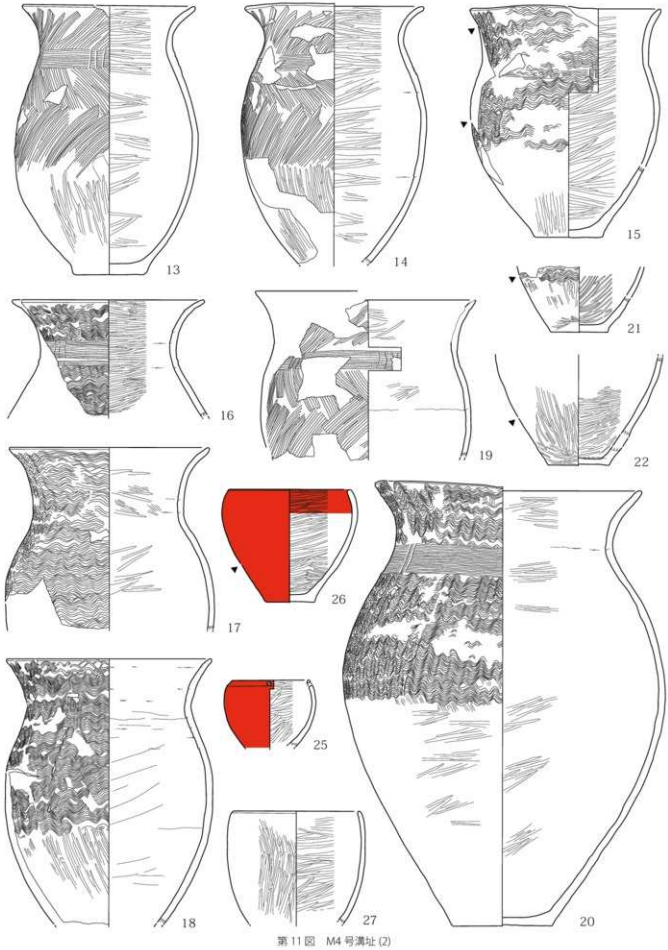
出土遺物は皆無であり時期は不明である。

第３節　ピット (第５図)

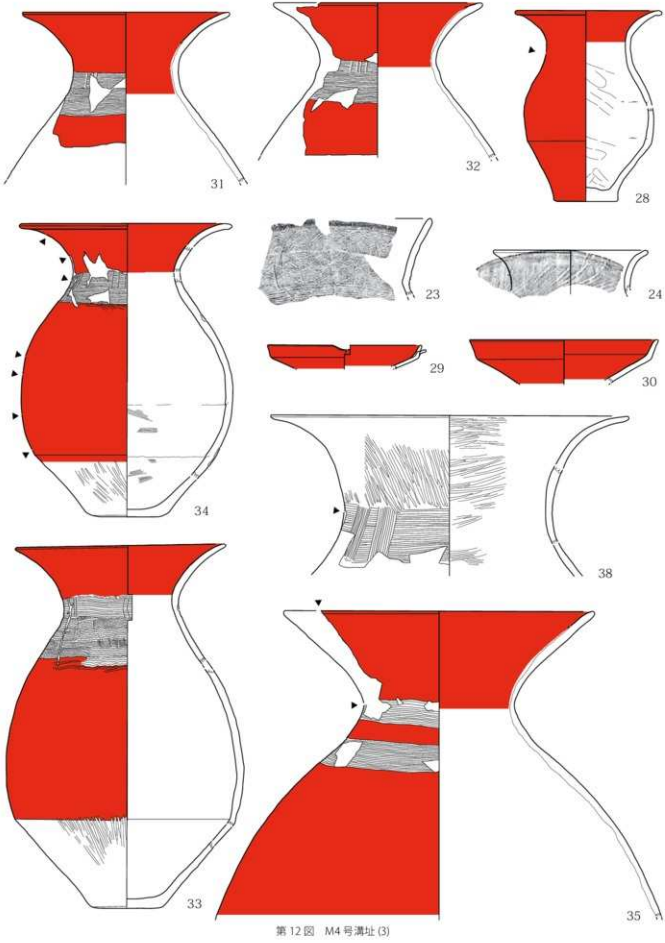
11 基検出された。調査範囲内で分布に濃淡は認められない。平面－円ないし楕円、断面－逆梯形の形態であ


A
B
3 6
1
2
4
5
1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR7/4ローム極少含。
2. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/4ローム多含。2/2少含。Φ1cm大パミス含。
3. にぶい黄橙色土層 (10YR7/4) ロームブロック。
4. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR7/4ローム・Φ1cm以下パミス少含。
5. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR2/2多含。7/4ローム・Φ1cm大パミス少含。
6. 砂利の堆積層。
標高 695.90m
0 (1:80) 2m
B1
A1
調査区外
0 (1:200) 5m
調査区外
D10
カクラン
1
2
3
4
5
6
7
8
10
11
9
12

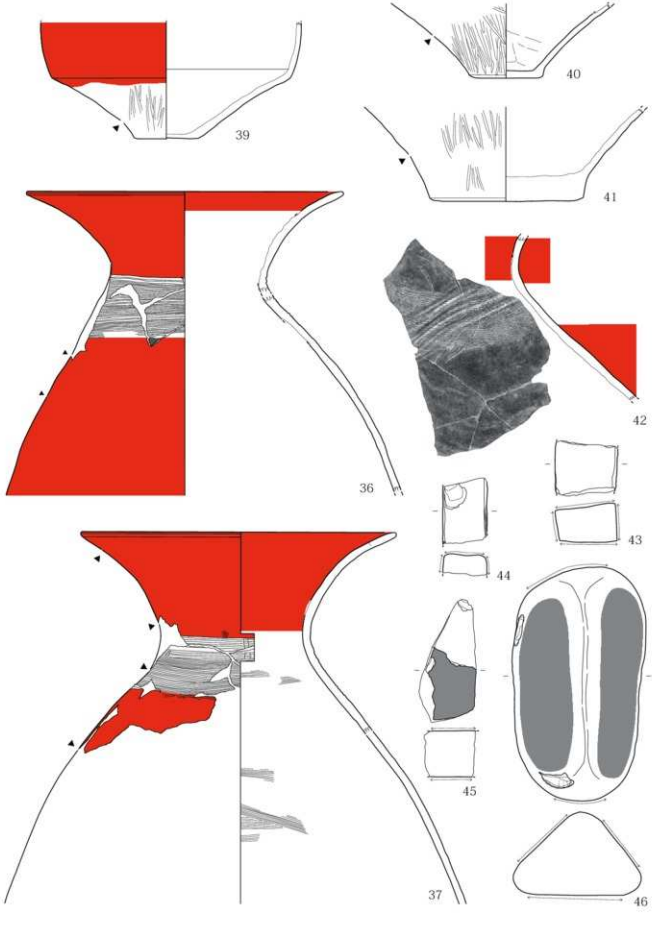
第10図　M4号溝址 (1)



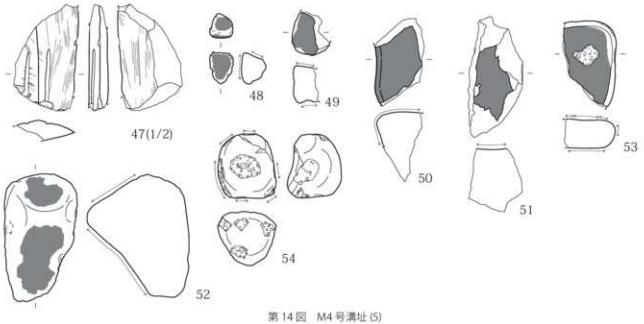
第11図　M4号溝址 (2)



第12図　M4号溝址(3)



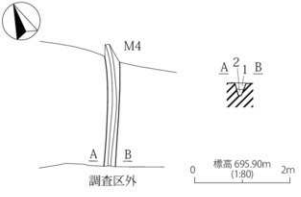
第13図　M4号溝址(4)



第 14 図　M4 号溝址 (5)

る。規模的には長軸長が最大 0.86 m、最小 0.29 m、単軸長が最大 0.73 m、最小 0.22 m、深度が最大 0.28 m、最小 0.09 mの規模であり、相対的に浅めである。

出土遺物は皆無であり、時期、性格共に不明である。



1. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/4ローム多含、Φ5mm大パミス含。
2. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR7/4ローム少含。

第 15 図　M5 号溝址

第Ⅲ章　まとめ

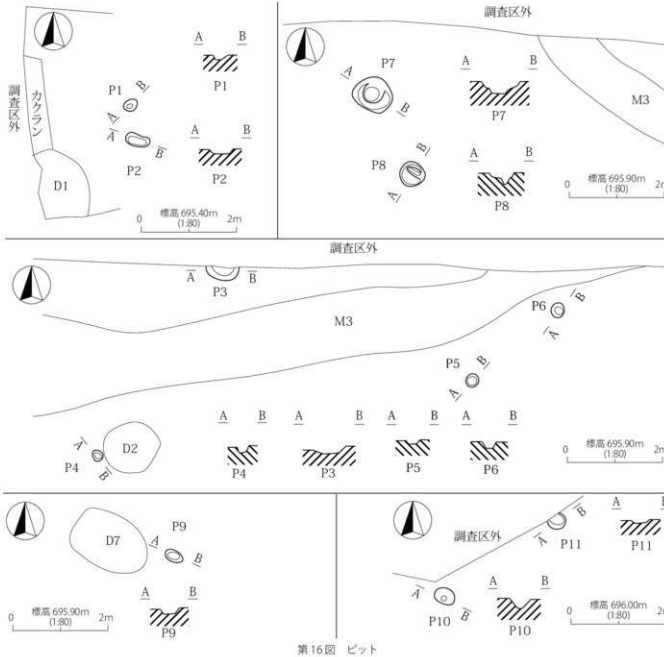
第 1 節　環濠について

佐久市岩村田一本柳とその周辺地域の集落は中期後半以降、所謂「環濠集落」を形成し大規模化をするが、比較的短期間に集落が移動している様相も看取される。

今回の調査で検出された 5 条の溝のうち M1、M2、M4 の 3 条は環濠であり、M2 と M4 は同一遺構の可能性が認められる。この環濠は、第 17 図のように展開する可能性が指摘でき、時期的には弥生時代後期後半、小山岳夫の後期Ⅳ期の所産と思われる。この想定範囲では環濠の北、西、南端部については、ほぼ把握出来ており、今後東端部が確認出来れば全容が明らかとなるであろう。

第 2 節　人形土器について

西一本柳遺跡ＸＸⅡ報告書において筆者は、佐久平の弥生時代人形造形品について極めて簡略にその概要をまとめた。今回の調査において出土した人形土器は、その時点では不明であった東一本柳遺跡Ⅱ出土の陽形土製品が人形土器の一部分であることを明らかにした。東一本柳遺跡Ⅱ出土の人形土器は体部片 1、腕 1、陽形 1 の計 3 点であるが、今回の調査で出土した人形土器と同様な形態の人形土器の存在を示唆し、このような形態の人形

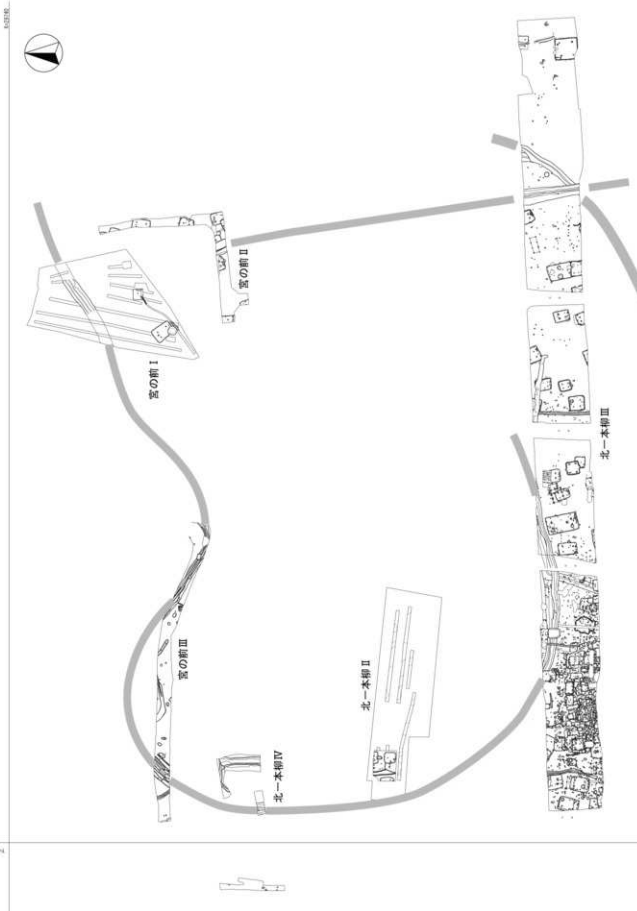


第 16 図　ピット

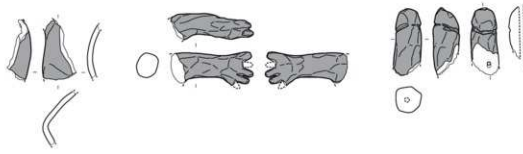
土器が決して特別な形態ではない事を裏付けるものと思われる。今後の人形土器研究に新たな視点を提示する資料であり、貴重な発見である。

第３節　石戈について

遺跡周辺では現在までに２点の石戈と１点の石剣が出土している。いずれも佐久平で金属器の普及が進む前段階である中期後半栗林期の所産である。今回出土した石戈片も M4 の項で述べたように暗渠から出土したものであり、水田造成時に周辺部から持ち込まれた可能性が高いものである。鎬と樋が看取できることから比較的忠実に銅戈を模していたものと推測される。人形土器同様に希少遺物の貴重な発見例となった。



第17図　宮の前遺跡環濠想定図



第 18 図　東一本柳遺跡Ⅱ出土人形土器

第 4 節　粘土紐巻上成形痕無調整鉢について

断面が円ないし楕円の粘土紐を巻上成形したままの小型鉢が当市の弥生時代後期遺跡から少なからず出土している。近年佐久平では資料が増加しているため、現時点での大まかな集成を行った。

大きさは所謂「ミニチュア土器」と同様である。粘土紐同士が弱く接着している状態のため極めて脆い。明らかに日常使用を前提とした土器ではない。千曲川流域では上田市「琵琶塚遺跡」・「浦田 B 遺跡」・「下町田遺跡Ⅴ」、長野市「篠ノ井遺跡群」・「松原遺跡群」などでの出土が確認できた。

同時期の土器、土製品で同様な成形手法が認められるのが「人形土器」である。両者の相違は「人形土器」は外面は調整され、赤彩を施し成形痕を消していることである。共通点は壊すことを前提とした成形であり、祭祀などの過程で壊される道具であったと思われるが、根拠はない。また、この「鉢」と「人形土器」が同じ祭祀などに使用されたかどうかも分からないが、環濠覆土からの出土例が多いことは共通している。

引用・参考文献

河崎　保編　2008「赤い土器のクニ」の考古学　株式会社　雄山閣

柳田康雄編　2012　東日本の弥生時代青銅器祭祀の研究　株式会社　雄山閣

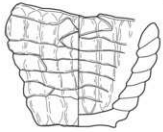
小山岳夫　2016　専修考古学 16 号　前方後円墳未築造地域における弥生から古墳時代前期の集落

設楽博己・石川岳彦　2017　弥生時代人物造形品の研究　（株）同成社

小林眞寿　2019　佐久市埋蔵文化財調査報告書　第 260 集　西一本柳遺跡ＸＸⅡ

小林眞寿　2021　佐久市文化財年報 29　第 2 回特別展「腕輪の国」補足資料

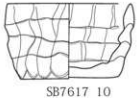
小林眞寿　2022　佐久市埋蔵文化財調査報告書　第 289 集　西一本柳遺跡ＸＸⅣ



SD100 365

SD101 689

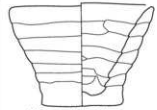
松原遺跡群出土



SB7617 10

篠ノ井遺跡群出土

長野市



第 62 号住居址 71

琵琶塚遺跡Ⅱ出土

SB22 297

480

浦田Ｂ遺跡出土

SB91 13

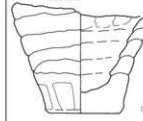
下町田遺跡Ⅴ出土

上田市

01219
(SD0067)

03412
(SB3093)

03414
(SB4039)



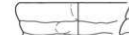
00090
(SB4002)

03416
(SB5019)

03418
(SB5026)

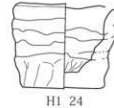
00875
(SK4259)

03419
(SD5003
～5005)

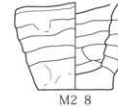


03421
(Ⅱ H1 検出面)

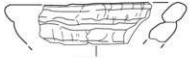
西近津遺跡群出土



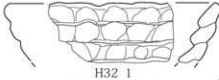
H1 24



M2 8



H33 1



H32 1

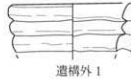
円正坊遺跡Ⅷ出土

H229 9

H229 10

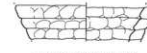
D93 161

M17 9



遺構外 1

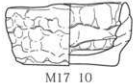
遺構外 32



道常遺跡遺構外 69

宮の前遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（長土呂）、道常遺跡出土

M17 8



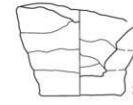
M17 10

北一本柳遺跡Ⅲ出土

35

38

36

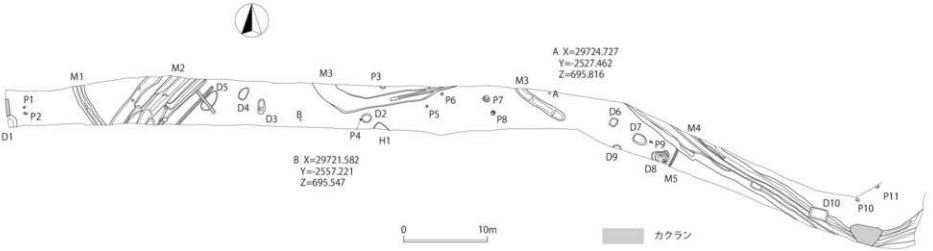


37

宮の前遺跡Ⅲ　M2 出土（今回の調査で出土したもの）

佐久市

第 19 図　貼土紐巻上成形無調整鉢集成図



第 20 図　宮の前遺跡Ⅲ全体図

竪穴建物計測表

遺構名	重複関係	主軸方位	長軸長 m	短軸長 m	壁残高 m	面積㎡	ピット	付属施設	備考	時期
H1	—	—	—	—	0.22	—	—	—	—	不明

土坑計測表

遺構名	重複関係	平面形態	長軸方位	長軸長 m	短軸長 m	壁残高 m	面積㎡	備考	時期
D1	—	—	—	—	—	1.09	—	—	—
D2	—	楕円形	N − 80° − E	1.20	1.06	0.14	0.58	—	—
D3	—	楕円形	N − 4° − E	1.84	0.83	0.27	0.64	—	—
D4	—	楕円形	N − 38° − E	1.59	0.99	0.18	1.00	—	—
D5	カクランに切られる	楕円形	N − 35° − E	(2.74)	(1.31)	0.14	(2.31)	—	—
D6	—	長方形	N − 26° − E	0.99	0.85	0.11	0.59	—	—
D7	—	楕円形	N − 58° − W	1.68	1.17	0.17	1.03	—	—
D8	—	—	—	—	—	1.12	—	—	—
D9	—	—	—	—	—	0.11	—	—	—
D10	M4 を切る	長方形	N − 74° − W	2.20	1.36	0.33	4.63	—	—

溝計測表

遺構名	重複関係	最大長	最大幅	最大深	備考	時期
M1	—	(5.35)	1.36	1.05	—	—
M2	—	(7.54)	7.17	1.10	—	—
M3	—	—	2.52	0.50	—	—
M4	D10 に切られ M5 を切る	(35.24)	2.85	1.17	—	—
M5	M4 に切られる	(2.64)	0.32	0.39	—	—

ピット計測表

遺構名	重複関係	平面形態	長軸長 m	短軸長 m	壁残高 m	備考	時期
P1	—	楕円形	0.32	0.25	0.09	—	—
P2	—	楕円形	0.52	0.27	0.11	—	—
P3	—	—	—	—	0.15	—	—
P4	—	楕円形	0.25	0.22	0.16	—	—
P5	—	円形	0.29	0.27	0.07	—	—
P6	—	楕円形	0.32	0.28	0.14	—	—
P7	—	楕円形	0.86	0.73	0.28	—	—
P8	—	円形	0.54	0.53	0.25	—	—
P9	—	楕円形	0.40	0.25	0.13	—	—
P10	—	楕円形	0.45	0.34	0.20	—	—
P11	—	—	—	—	0.10	—	—

土坑出土遺物観察表

No	器種器形		法量				成形・調整		備考	出土層位
			口径（長）	底径（短）	器高（厚）	重量等	内面	外面		
D1-1	弥生土器	高坏	—	—	〈5.8〉	—	坏部：ミガキ→赤彩、脚部：ナデ	ミガキ→赤彩	完全実測	覆土
D1-2	弥生土器	甕	—	6.3	〈4.1〉	—	ミガキ	ミガキ	完全実測	覆土
D1-3	弥生土器	壺	—	—	〈4.1〉	—	ナデ	ミガキ→赤彩	回転実測	覆土
D2-1	弥生土器	鉢	—	—	—	—	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	破片実測	覆土

溝出土遺物観察表 (1)

No	器種器形		法量				成形・調整		備考	出土層位
			口径（長）	底径（短）	器高（厚）	重量等	内面	外面		
M1-1	弥生土器	高坏	—	12.2	〈8.3〉	—	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	完全実測	覆土
M1-2	弥生土器	甕	—	—	—	—	ミガキ	櫛描波状文	破片実測・拓本	覆土
M2-1	弥生土器	片口鉢	10.6	6.4	11.7	—	ミガキ、ナデ	ミガキ、体部ミガキ→赤彩	完全実測	覆土
M2-2	弥生土器	鉢	12.8	3.7	7.5	—	ミガキ	ミガキ	完全実測	覆土
M2-3	弥生土器	鉢	(12.8)	(3.8)	5.3	—	赤彩（剥離）	赤彩	回転実測	覆土
M2-4	弥生土器	片口鉢	(14.8)	(4.0)	6.0	—	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	回転実測	覆土
M2-5	弥生土器	高坏	13.5	—	〈6.9〉	—	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	完全実測	覆土
M2-6	弥生土器	高坏	(15.1)	—	〈6.3〉	—	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	完全実測	覆土
M2-7	弥生土器	高坏	16.1	—	〈8.2〉	—	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	完全実測	覆土
M2-8	弥生土器	高坏	—	(10.5)	〈6.7〉	—	ナデ	ミガキ→赤彩	完全実測	覆土
M2-9	弥生土器	高坏	—	—	〈6.0〉	—	ミガキ→赤彩、脚部ナデ	ミガキ→赤彩	完全実測	覆土
M2-10	弥生土器	甕	11.2	5.6	12.4	—	ミガキ	櫛描波状文、ミガキ	完全実測	覆土
M2-11	弥生土器	甕	(11.8)	—	〈5.9〉	—	ミガキ	櫛描簾状文、櫛描波状文	回転実測	覆土
M2-12	弥生土器	甕	(12.6)	—	〈9.9〉	—	ミガキ	斜走文	完全実測	覆土
M2-13	弥生土器	甕	13.7	—	〈14.6〉	—	ミガキ	斜走文、ミガキ	完全実測	覆土
M2-14	弥生土器	甕	(14.2)	—	〈9.5〉	—	ミガキ	櫛描簾状文、櫛描波状文	回転実測	覆土
M2-15	弥生土器	甕	(14.4)	—	〈13.7〉	—	ミガキ	斜走文、ミガキ	完全実測	覆土
M2-16	弥生土器	甕	(15.0)	(5.0)	15.0	—	ミガキ	櫛描簾状文、櫛描波状文、ミガキ	回転実測	覆土
M2-17	弥生土器	甕	(15.4)	6.9	18.3	—	ナデ→ミガキ	櫛描簾状文、櫛描波状文、ミガキ	完全実測	覆土
M2-18	弥生土器	甕	(15.8)	—	〈5.6〉	—	ミガキ	斜走文	回転実測	覆土
M2-19	弥生土器	甕	(17.7)	6.2	22.3	—	ミガキ	櫛描簾状文、櫛描波状文、ミガキ	完全実測	覆土

溝出土遺物観察表 (2)

No	器種	器形	法量				成形・調整		備考	出土層位
			口径（長）	底径（短）	器高（厚）	重量等	内面	外面		
M2-20	弥生土器	甕	(17.8)	6.7	20.8	—	ミガキ	横羽状文、櫛描簾状文、櫛描波状文、ミガキ	完全実測	覆土
M2-21	弥生土器	甕	(26.4)	—	〈22.2〉	—	ナデ→ミガキ	櫛描波状文	回転実測	覆土
M2-22	弥生土器	甕	—	6.3	〈7.3〉	—	ミガキ	ミガキ	完全実測	覆土
M2-23	弥生土器	甕	—	(7.0)	〈15.1〉	—	ミガキ	櫛描波状文、ミガキ	回転実測	覆土
M2-24	弥生土器	無頸壺	—	4.9	〈6.1〉	—	ミガキ→赤彩	ヘラケズリ、ミガキ→赤彩	完全実測	覆土
M2-25	弥生土器	壷	—	6.4	〈3.4〉	—	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	完全実測	覆土
M2-26	弥生土器	壷	—	7.2	〈10.2〉	—	ナデ	ミガキ→赤彩	完全実測	覆土
M2-27	弥生土器	壷	—	(11.2)	〈6.2〉	—	ナデ	ケズリ→ミガキ	回転実測	覆土
M2-28	弥生土器	壷	—	—	〈13.4〉	—	ミガキ→赤彩（剥離）	ミガキ→赤彩	回転実測	覆土
M2-29	弥生土器	壷	—	—	〈20.7〉	—	ナデ	「T」字文、ミガキ→赤彩	回転実測	覆土
M2-30	弥生土器	壷	—	—	〈22.7〉	—	ハケ目→ミガキ	ミガキ→赤彩	回転実測	覆土
M2-31	弥生土器	壷	—	—	—	—	赤彩	口唇部 R(L2) 縄文、赤彩	破片実測、拓本	覆土
M2-32	弥生土器	壷	—	—	—	—	口唇部櫛描斜走文、赤彩	赤彩	破片実測、拓本	覆土
M2-33	弥生土器	壷	—	—	—	—	剥離	赤彩、頸部ヘラ描矢羽文	破片実測、拓本	覆土
M2-34	弥生土器	蓋	10.8	3.4	5.5	—	ミガキ、天井に9ケの穿孔内6ケは両側から穿孔3ケは内側より未穿孔	ミガキ	完全実測	覆土
M2-35	弥生土器	手捏土器	6.6	—	〈2.7〉	—	輪積痕を残す、粗いナデ		完全実測	覆土
M2-36	弥生土器	手捏土器	6.8	4.0	3.8	—	輪積痕を残す、粗いナデ		完全実測	覆土
M2-37	弥生土器	手捏土器	6.8	4.2	4.9	—	輪積痕を残す、粗いナデ		完全実測	覆土
M2-38	弥生土器	手捏土器	—	—	—	—	輪積痕を残す、粗いナデ		破片実測	覆土
M2-39	弥生土器	人型土器	—	—	〈9.9〉	—	ナデ、輪積痕残す	赤彩	回転実測	覆土
M2-40	弥生土器	人型土器	—	7.0	〈16.0〉	—	ナデ?、輪積痕残す	赤彩	完全実測	覆土
M2-41	弥生土器	土器片円盤	6.4	5.8	0.8	—	ハケナデ	ミガキ→赤彩	完全実測	覆土
M2-42	石器	磨石	2.6	〈2.6〉	2.7	〈19.9〉	全面磨り		完全実測	覆土
M2-43	石器	磨石	〈6.8〉	〈5.5〉	5.2	〈273.0〉		—	完全実測	覆土
M2-44	石器	磨石	6.9	6.2	1.4	90.6	片岩?、磨面 1		完全実測	覆土
M2-45	石器	磨石	10.4	5.0	3.1	220.0	凹状の敲痕一ケ所、磨面 2		完全実測	覆土
M2-46	石器	磨・敲石	15.9	8.5	5.9	1086.0	磨面 2		完全実測	覆土
M3-1	土師器	高坏	(16.6)	—	〈4.3〉	—	放射状ヘラミガキ	放射状ヘラミガキ	回転実測	E区
M3-2	土師器	台坏甕	(12.6)	—	〈1.7〉	—	ナデ	ナデ	回転実測	E区
M3-3	弥生土器	壺	—	—	—	—	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	破片実測	E区
M3-4	石器	磨石	9.0	4.6	5.1	—	正面に磨り		完全実測	覆土
M4-1	弥生土器	鉢	14.8	4.5	5.9	—	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	完全実測	E区
M4-2	弥生土器	鉢	—	(4.6)	〈2.6〉	—	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	回転実測	E区
M4-3	弥生土器	鉢	—	5.1	〈2.1〉	—	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	完全実測	E区
M4-4	弥生土器	高坏	—	(8.0)	〈7.8〉	—	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	完全実測	覆土
M4-5	弥生土器	高坏	—	9.7	〈3.4〉	—	ナデ	ミガキ→赤彩	完全実測	E区
M4-6	弥生土器	高坏	—	(18.0)	〈9.0〉	—	ハケ目→ナデ	ミガキ→赤彩	回転実測	E区
M4-7	弥生土器	高坏	—	(20.7)	〈15.6〉	—	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	回転実測	E区
M4-8	弥生土器	高坏	—	—	〈5.2〉	—	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	完全実測	w区
M4-9	弥生土器	甕	(13.8)	—	〈4.5〉	—	ミガキ	頸部櫛描簾状文、その他櫛描斜走文	回転実測	覆土
M4-10	弥生土器	甕	16.4	7.2	25.6	—	ミガキ	頸部櫛描横線文、その他櫛描斜走文	完全実測	覆土
M4-11	弥生土器	甕	16.9	6.3	21.0	—	ハケ目→ミガキ	櫛描波状文	完全実測	E区
M4-12	弥生土器	甕	18.3	7.5	26.5	—	ミガキ	頸部櫛描簾状文、その他櫛描斜走文	完全実測	E区

溝出土遺物観察表 (3)

No	器種	器形	法量				成形・調整		備考	出土層位
			口径（長）	底径（短）	器高（厚）	重量等	内面	外面		
M4-13	弥生土器	甕	18.4	7.8	28.6	—	ミガキ	頸部櫛描簾状文、その他櫛描斜走文	完全実測	覆土
M4-14	弥生土器	甕	19.0	—	〈27.7〉	—	ミガキ	頸部櫛描簾状文、その他櫛描波状文	完全実測	覆土
M4-15	弥生土器	甕	(20.3)	7.2	24.6	—	ミガキ	頸部櫛描簾状文、その他櫛描波状文	完全実測	覆土
M4-16	弥生土器	甕	(20.4)	—	〈12.4〉	—	ミガキ	頸部櫛描簾状文、その他櫛描波状文	回転実測	E区
M4-17	弥生土器	甕	21.2	—	〈19.3〉	—	ハケ目→ミガキ	櫛描斜走文	完全実測	E区
M4-18	弥生土器	甕	(21.8)	—	〈28.2〉	—	ナデ、器面摩耗	櫛描波状文、ミガキ	回転実測	E区
M4-19	弥生土器	甕	(22.8)	—	〈17.0〉	—	ミガキ	頸部櫛描簾状文、その他櫛描斜走文	回転実測	覆土
M4-20	弥生土器	甕	28.3	10.6	47.2	—	ミガキ	頸部櫛描簾状文、その他櫛描波状文	完全実測	E区
M4-21	弥生土器	甕	—	6.0	〈7.0〉	—	ミガキ	櫛描波状文	完全実測	覆土
M4-22	弥生土器	甕	—	6.4	〈11.5〉	—	ミガキ	ミガキ	完全実測	E区
M4-23	弥生土器	甕	—	—	—	—	ミガキ	頸部櫛描簾状文、その他櫛描波状文	破片実測、拓本	w区
M4-24	弥生土器	甕	—	—	—	—	ミガキ	櫛描斜走文	回転実測	E区
M4-25	弥生土器	無頸壺	8.2	—	〈7.2〉	—	ミガキ	ミガキ→赤彩	回転実測	覆土
M4-26	弥生土器	無頸壺	(12.8)	5.3	12.0	—	ミガキ、口縁部赤彩	ミガキ→赤彩	回転実測	E区
M4-27	弥生土器	無頸壺	(13.8)	—	〈12.0〉	—	ミガキ	ミガキ	回転実測	E区
M4-28	弥生土器	壺	(15.5)	6.8	20.3	—	口縁部ミガキ→赤彩、頸部下ナデ	ミガキ→赤彩	完全実測	E区
M4-29	弥生土器	壺（片口）	(16.4)	—	〈2.5〉	—	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	回転実測	覆土
M4-30	弥生土器	壺	(22.0)	—	4.6	—	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	回転実測	覆土
M4-31	弥生土器	壺	(22.0)	—	〈18.2〉	—	ミガキ→赤彩	頸部櫛描横線文、簾状文、ミガキ→赤彩	回転実測	覆土
M4-32	弥生土器	壺	(22.2)	—	〈16.2〉	—	口縁部ミガキ→赤彩、頸部下器面剥落	頸部櫛描波状文、簾状文、ミガキ→赤彩	回転実測	覆土
M4-33	弥生土器	壺	22.3	7.7	38.7	—	口縁部ミガキ→赤彩、頸部下ナデ	頸部櫛描波状文、簾状文、ミガキ→赤彩	完全実測	E区
M4-34	弥生土器	壺	(22.6)	(7.7)	〈31.2〉	—	ナデ、ハケ目	頸部櫛描横線文、簾状文、ミガキ→赤彩	完全実測	覆土
M4-35	弥生土器	壺	(33.0)	—	〈32.3〉	—	ミガキ→赤彩	頸部櫛描横線文	回転実測	覆土
M4-36	弥生土器	壺	34.0	—	〈32.6〉	—	口縁部ミガキ→赤彩、器面剥落	頸部櫛描横線文、ミガキ→赤彩	完全実測	覆土
M4-37	弥生土器	壺	(34.3)	—	〈40.4〉	—	口縁部ミガキ→赤彩、頸部下ハケ目	頸部櫛描横線文、簾状文、ミガキ→赤彩	完全実測	w区
M4-38	弥生土器	壺	(38.0)	—	〈17.0〉	—	ハケ目→ミガキ	頸部櫛 描「T」字文、ミガキ	回転実測	E区
M4-39	弥生土器	壺	—	7.0	〈12.6〉	—	器面剥落	ミガキ→赤彩	回転実測	覆土
M4-40	弥生土器	壺	—	8.0	〈8.0〉	—	ナデ	ミガキ	回転実測	覆土
M4-41	弥生土器	壺	—	16.7	〈10.1〉	—	器面剥落	ミガキ	回転実測	E区
M4-42	弥生土器	壺	—	—	—	—	ミガキ→赤彩	頸部櫛描波状文、ミガキ→赤彩	破片実測、拓本	w区
M4-43	石器	砥石	〈6.0〉	〈6.8〉	〈4.3〉	〈224.0〉	砥面 4、上下欠損		完全実測	覆土
M4-44	石器	砥石	〈7.2〉	〈4.9〉	〈2.4〉	〈152.1〉	砥面 3、上下・裏面欠損		完全実測	覆土
M4-45	石器	台石	〈13.4〉	〈6.2〉	〈5.0〉	〈690.0〉	正・裏面に磨り、四方欠損		完全実測	覆土
M4-46	石器	台石	25.3	14.5	9.0	4360.0	使用面 4		完全実測	覆土
M4-47	石製品	磨製石斧	〈5.65〉	〈3.4〉	〈1.0〉	〈20.6〉	鏃、種 2 本あり		完全実測	覆土
M4-48	石器	磨石	〈3.4〉	〈2.5〉	〈2.6〉	〈24.0〉	上部・正面に磨り		完全実測	ケン
M4-49	石器	磨石	〈4.55〉	〈4.0〉	〈4.0〉	〈751.0〉	正面に磨り、周囲欠損		完全実測	w区
M4-50	石器	磨石	〈9.3〉	〈5.3〉	〈7.4〉	〈380.0〉	正面・左側に磨り		完全実測	覆土
M4-51	石器	磨石	〈12.8〉	〈5.8〉	〈6.7〉	〈650.0〉	正面に磨り		完全実測	覆土
M4-52	石器	磨石	〈13.5〉	〈7.7〉	〈10.8〉	〈1060.0〉	上部・正面に磨り		完全実測	覆土
M4-53	石器	磨・敲石	〈9.1〉	〈5.7〉	〈3.1〉	〈280.0〉	正・裏面に磨り、正面に敲打痕		完全実測	覆土
M4-54	石器	敲石	〈6.8〉	〈6.0〉	〈5.7〉	〈350.0〉	全面に敲打痕		完全実測	覆土

H 1 号竪穴建物

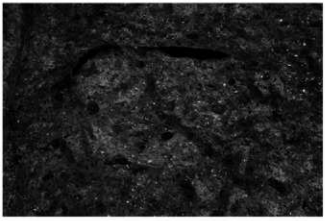
D 3 号土坑

D 1 号土坑

D 2 号土坑

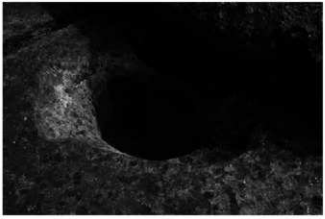
D 4 号土坑

D 5 号土坑

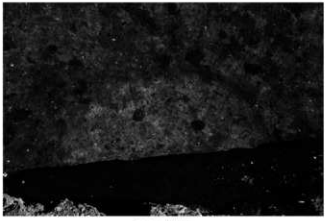


D 6 号土坑

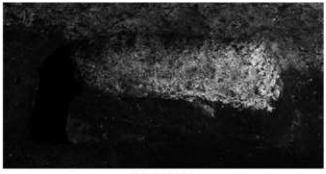
D 7 号土坑



D 8 号土坑



D 9 号土坑



D 10 号土坑

M 1 号溝

M２号溝（東から）

M２号溝土層（北壁）

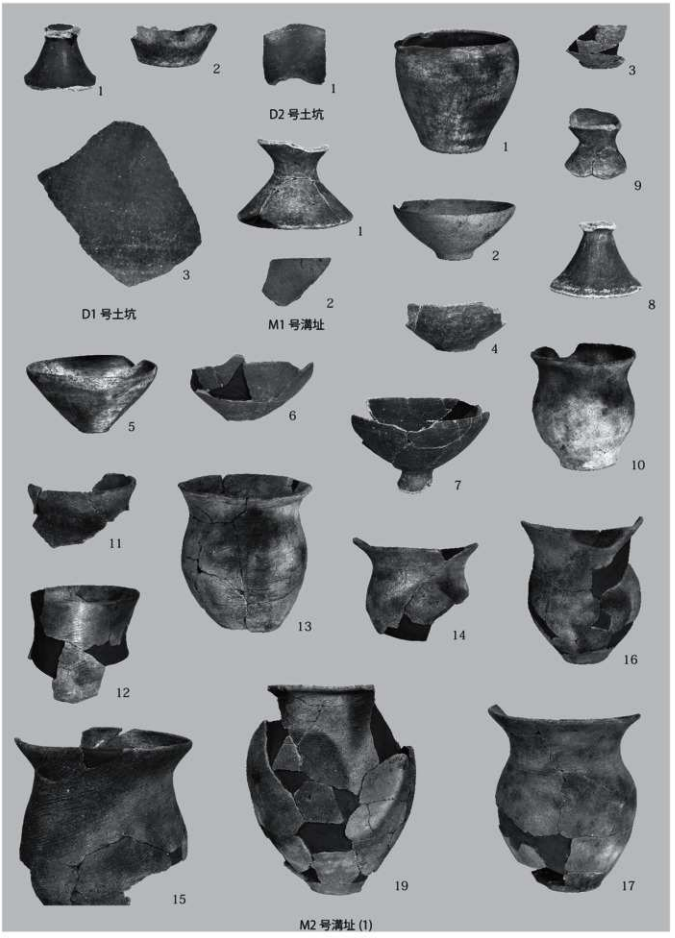
M３号溝（東から）

M４号溝土層（西から）

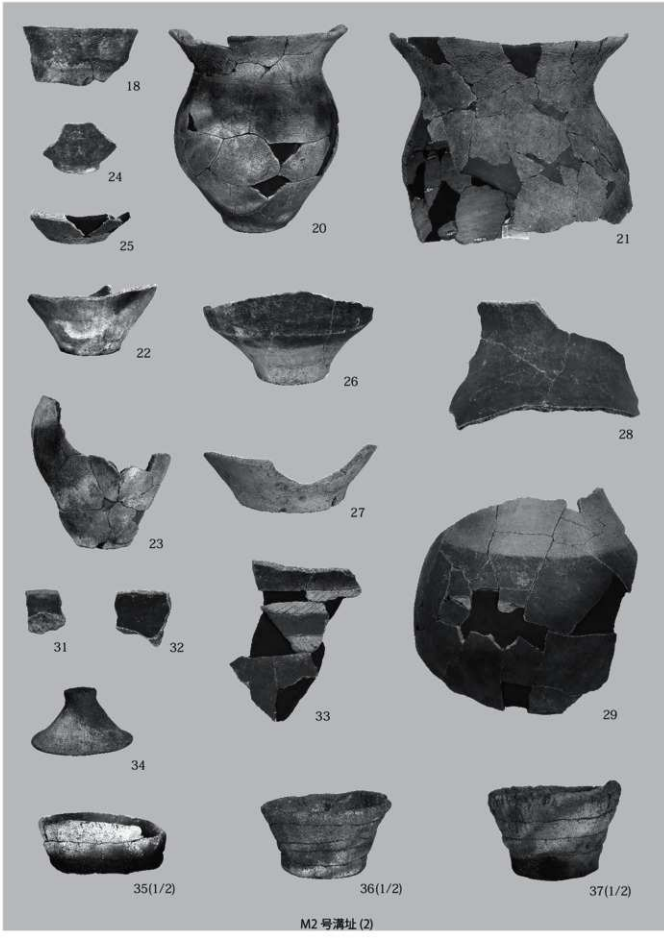
M４号溝（西半）

M４号溝（東半）

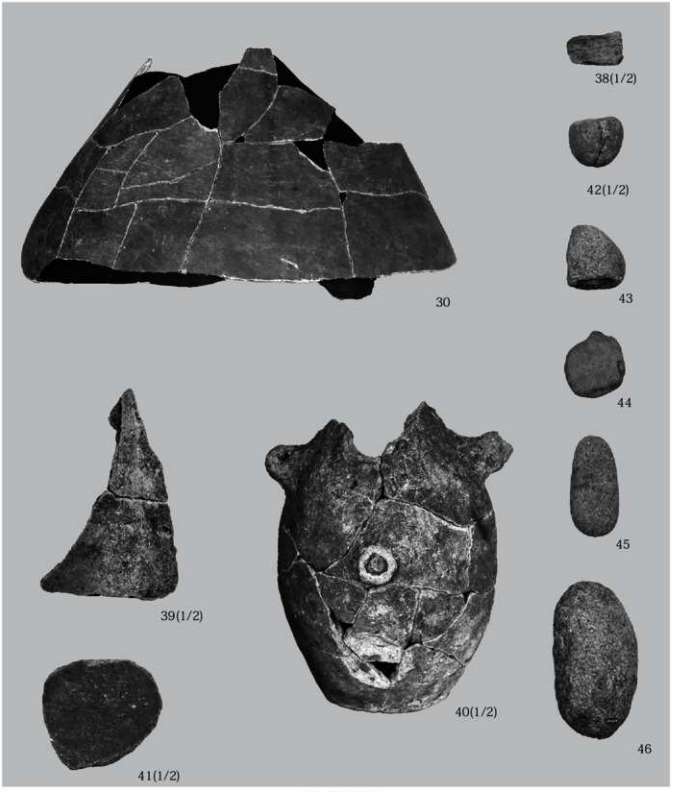
M５号溝



M2 号溝址 (1)



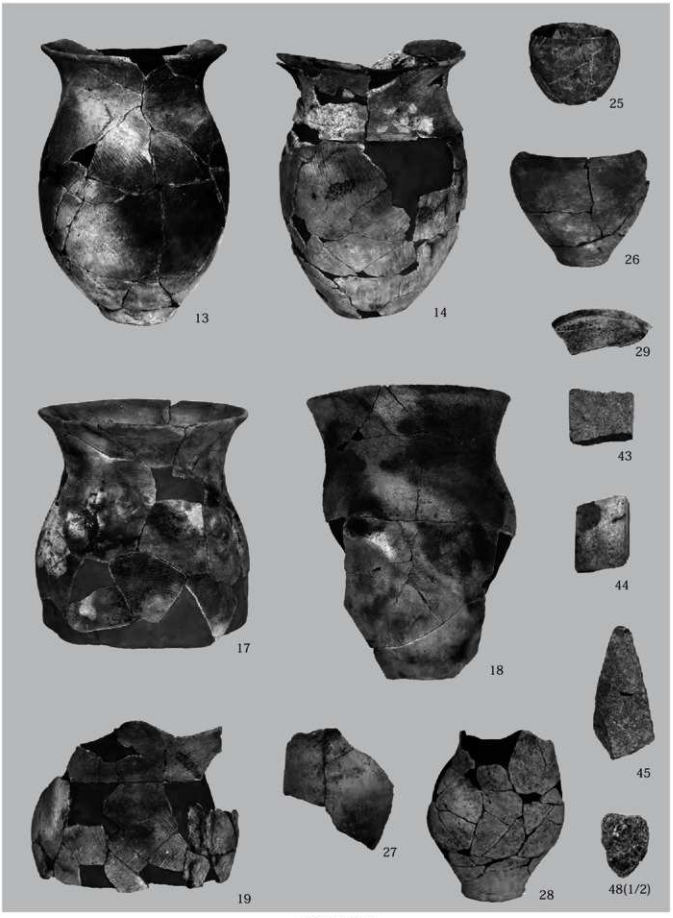
M2 号溝址 (2)



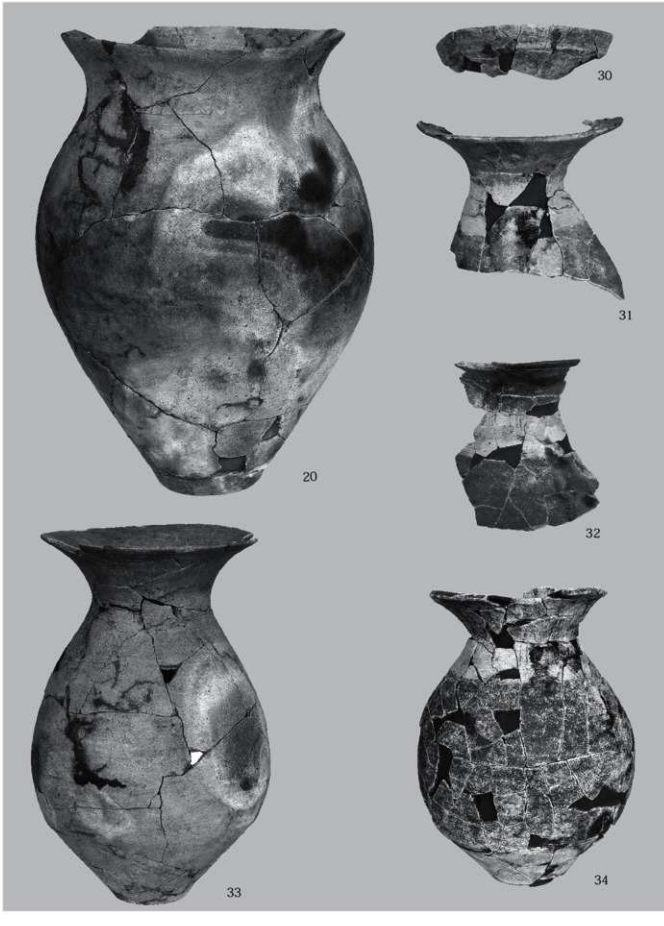
M2 号溝址 (3)

M3 号溝址

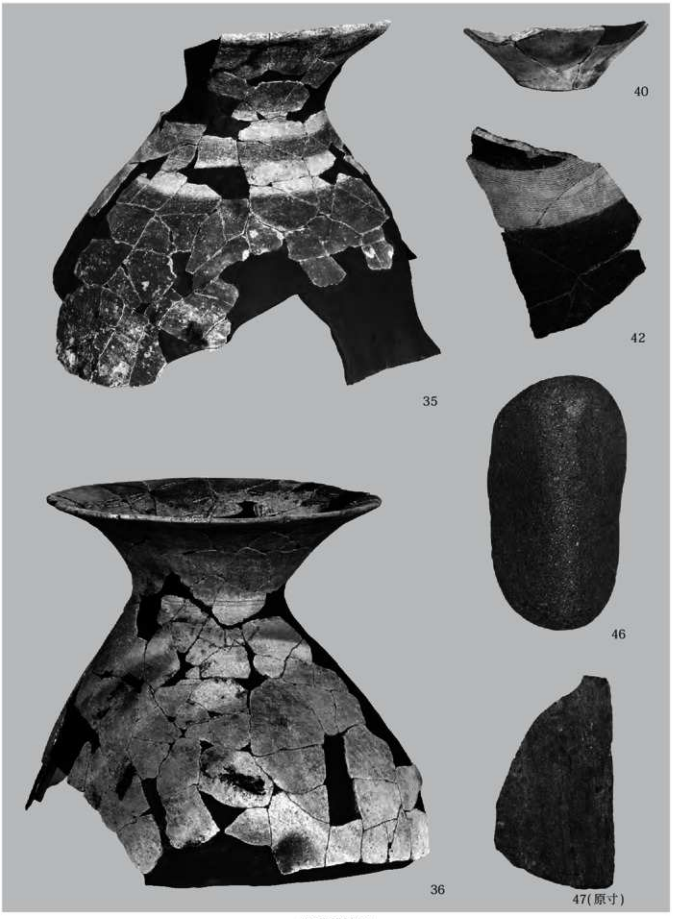
M4 号溝址 (1)



M4 号溝址 (2)



M4 号溝址 (3)



M4 号溝址 (4)

M4 号溝址 (5)

ふりがな	いわむらだいせきぐん　みやのまえいせき3
書名	岩村田遺跡群　宮の前遺跡Ⅲ
副書名	
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第291集
編著者名	小林眞寿
編集機関	佐久市教育委員会　文化振興課
所在地	長野県佐久市中込2913　℡0267-63-5321　FAX0267-63-5322
発行年月日	令和5年(2023)　3月

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
みやのまえいせきさん 宮の前遺跡Ⅲ	さくしいわむらだあざみやのまえ1993ほか 佐久市岩村田字宮の前1993他	20217	52	36°16'04"	138°28'19"	20210401 ～ 20210421	551.85㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮の前遺跡Ⅲ	集落址	弥生・古墳	竪穴建物址-1棟 土坑-10基 溝-5条（環濠3条） ピット-11基	弥生土器 土師器 石器・石製品	弥生時代後期の人形土器、中期の磨製石戈片の検出。
要約	湯川段丘上に営まれた弥生時代後期後半の環濠集落である。				

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第291集

岩村田遺跡群　宮の前遺跡Ⅲ

2023年3月

編集・発行　佐久市教育委員会

〒385-8501　長野県佐久市中込3056

社会教育部　文化振興課　文化財事務所

〒385-0051　長野県佐久市中込2913

℡0267-63-5321

印刷所　キクハラインク有限会社

'22 第291集

宮の前遺跡Ⅲ

佐久市教育委員会